



TITLE:

<Essay>第十三回 日韓財務省サッカー一部交流戦 -絶対に負けられない戦いが、ここにもある-

AUTHOR(S):

北條, 隆

CITATION:

北條, 隆. <Essay>第十三回 日韓財務省サッカー一部交流戦 -絶対に負けられない戦いが、ここにもある-. 公共空間 2013, 11: 39-42

ISSUE DATE:

2013

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184873>

RIGHT:

本誌掲載の写真・イラスト・記事の無断転載・二次利用はお断りいたします

第十三回 日韓財務省サッカー部交流戦

―絶対に負けられない戦いが、ここにもある―

京都大学公共政策大学院七期生 北條 隆

■もうひとつの日韓戦

二〇一三年六月八日。日本がFIFAワールドカップ二〇一四ブラジル大会への出場を決めた日からわずか四日後。韓国済州（チェジュ）島のサッカー競技場で、日本代表と韓国代表による国際親善試合が行われていた。ただし、プロの代表戦ではない。日韓両国の財政当局である日本財務省（Ministry of Finance）と韓国企画財政部（Ministry of Strategy and Finance）のサッカー部による毎年恒例の親善試合である。

■サッカー部交流戦

「恒例の」と言っても、そもそも広く知られていないが、財務省にはサッカー好きの職員で組織されるサッカー部がある。普段は銀行等が加盟するリーグ戦や地域のフットサル大会等に参加している。一方、韓国の企画財政部にも活動熱心なサッカー部があり、先方から提案を頂いて、日韓W杯に先立ち二〇一〇年から友好親善のための交流戦が始まった。それ以来、交互

に相手国を訪問して試合を行っている。二〇一一年は東日本大震災の影響で中止となったが、韓国側から強い励ましの声を頂いて翌年から再開することができた。そして、第

十三回目となる今年は韓国での開催となった。私は四回目の参加だが、初回から毎回参加している両国の部員もたくさんいる。（過去の交流戦の様様については、上西康文「海峡を越えたボレー・シユート―MOFイレブン韓国遠征記―」（財務省広報誌『ファイナンス』二〇一〇年十二月号）及び森田稔「日本財務省・韓国財政経済部サッカー部 第四回友好親善試合―韓国サッカーの底力を体感した2連戦―」（同二〇一〇年六月号）が詳しく、面白い。）

交流戦に臨むチームの士気は高く、数か月前からリーグ戦を通じて調子を整えていく。毎回二試合が行われ、これまでの通算成績は、日本の八勝十二敗四分。連勝すれば大喜びで乾杯し、連敗すれば悔しさが翌年まで後を引く。近年では、そんな白熱する交流戦のことが、財務大臣同士の意見交換の場である「日韓財務対話」や幹部職員の交流の場でも話題に上がるという。

■前日も気が抜けない

さて、今回の舞台は韓国の南の海に浮かぶ済

州島。成田から二時間半、閑空からは一時間四十分で行ける一番近い海外リゾートで、日本留学経験のある職員の方がおっしゃるには、「昔は宮崎県のようにハネムーンで賑わい、最近ではドラマのロケ地としても有名な島」だという。

試合前日に到着した私達は、競技場下見のために島南部のソギポ市に移動した。ところが、現地のガイドさんに案内されたのは済州島の景勝地や「オルレ」と呼ばれるウォーキングコースで、競技場の屋根すら見えてこない。そういえば、この親善行事はサッカーの試合を行うことが全てではなくなっている。職員が交流し、お互いの国のことを学ぶ貴重な機会でもある。いま韓国ではウォーキングが人気で、そのブームは済州島から始まった。「オルレ」は、この島の方言で「家に帰る細い道」を意味し、済州島の魅力を再発見するためのウォーキングコースの名称としても使われている。日本でも「九州オルレ」や「みちのく潮風トレイル」等のウォーキングコースが注目され始めているようだ。我々日本チームを従えてガイドさんはすいすい歩く。一時間近く歩いてもまったく終わりが見えない頃、これは試合前日に日本チームを疲れさせる韓国側の作戦ではないか、と訝る。というのも、昔は相手チームの戦力を削ぐために（？）、試合前夜の懇親会で爆弾酒（ビールジョ

ツキにウイスキーや焼酎入りのショットグラスを沈めたカクテル」による終わりなき乾杯交換や、宿泊部屋にお酒を持って乗り込んでくる「夜襲」があり、体を張って中心選手を守るガード役までいたからだ。「皆さんにはオルレの中でも特に風景が人気の区間を歩いてもらいました。いかがでしたか」と、実はとつても日本最良だったガイドさんにはにかみ顔で応えることができたのは、移動バスに戻った二時間半後である。

次にお待ちかねの試合会場を視察。日韓W杯で使用されたサッカー専用競技場のピッチに足を踏み入れ、日本チーム大興奮。火山島である済州島をかたどったシルエットや巨大なテント膜でできたアーチ屋根が見事で、「韓国で最も美しい競技場」に選定されたというのも納得である。これまでも韓国開催時には、韓国代表チームの合宿施設やアジア大会使用会場等の立派な会場を用意していただいております、感謝したい。

「韓国チームには国から援助があるのでは」と噂されるほど、交流戦にかける熱の入れようを感じる。なお、部員のポケットマネーと支援カンパで質素に活動する日本チームは、(Jリーグや学生競技が盛んな初夏という時期も重なって)天然芝の会場探しに毎回苦労している。

夜にホテルで韓国チームと顔を合わせたときには、昨年より若い部員が増えた印象を受けた。

伝統的に韓国チームは、平均年齢は高いものの、兵役を経たがっしりした体格で球際の競り合いに強く、運動量も豊富で手強い相手である。これに対して日本は、相手の裏を狙うスピードとパスやドリブルのテクニクで対抗しているが、韓国に更に若さが加わってくると要注意である。



■親善という名の本気

試合当日、朝食ビュッフェに洋食とともに並ぶキムチの鮮やかな色と香りにとまどいを感じ

チェジュワールドカップ競技場

つつ、一口食べて一気に目を覚ました私達であるが、前日の好天からは予想もつかない雨を恨めしそうに眺めていた。事前練習をする、ピッチの水はけは良いものの、芝が濡れているためパスの球足が伸び、距離感覚に苦しんだ。それでも、電光掲示板に浮かび上がる「歓迎 日韓財務当局者間親善試合」の文字に心が躍る。

開会式では、ソギボ市長からご挨拶をいただき、両国の代表者がますますの友好親善と試合の健闘を誓い合った。さらに、恐れ多くもゲームを裁いていた韓国プロサッカーリーグ(Kリーグ)の審判団から激励をいただき、その後記念バナーの交換や写真撮影が行われた。

雨足が強まる中、第一試合のキックオフ。日本は、立ち上がりから浮足立ってボールキープができず、ゴール前の混戦からこぼれ球を押し込まれ、先制点を奪われてしまう。しかし、その後は落ち着きを取り戻し、右サイドからのセタリングに合わせた綺麗な形で得点。前半を一对一で折り返すことができた。休憩中はロツカールームで戦術の修正。試合中に感じた意見をぶつけあう。親善試合でも気持ちに手抜きはなく後半に向かう。ただ、今回の試合時間は普段のリーグ戦より二十分も長い九十分間である。さすがに終盤は体力的に苦しく、全体的に足が止まってしまい、日本のクリアボールを上手に

奪う韓国の波状攻撃の前に追加点を奪われてしまった。一試合目は一対二の敗戦。日本チームは濡れ鼠となって昼食に引き上げた。昼食中は談笑する韓国チームを横目に、悔しさとブルコギを嘯みしめながら二試合目での雪辱を誓う。

お互いに先発メンバーを大きく入れ替えて臨んだ二試合目は、日本チームにとってまさに絶対負けられない戦いとなった。雨は止んだが風が強まっている。風上のエンドを取ることができた日本は、押し気味に試合を進める。そろそろ先制点が欲しい時間帯、日本は右サイドからのクロスを受けたフォワードの選手が落ちて着いて相手ディフェンダーを抜き去って先制のゴール。さらに、ペナルティエリア外から距離のあるフリーキックが相手キーパーの頭上を越えて直接ネットを揺らし、追加点をあげる。そのまま押し切りたい日本だったが、韓国に左サイドのディフェンスの裏を突破されて失点し、二対一と一点リードで前半を折り返した。後半は、交代選手を多用する総力戦で一進一退の攻防になり、両チームとも次第に疲れが見えてくる。いつの間にか競技場への観光客が座り始めて観客となり、日韓戦はアウェー状態となった。終盤、韓国のシュートが何度も日本ゴールを脅かす場面では、会場中に歓声と悲鳴が響く。終始フェアな笛を吹いてくれた主審が示したアディ

ショナルタイムは五分(長い!)。それでも間延びした中盤でこぼれ球をしぶとく拾ってキープした日本が、なんとか二対一で勝利した。これで、通算成績は日本の九勝十三敗四分となった。



日本チームと韓国チームの集合写真

に四対四のゾーンで攻め・守る形をとる。往々にして、昼間試合で激しく削り合った相手が素敵な笑顔で目の前にいたりする。試合の講評やMVP表彰が終わらないうちに各テーブルで爆弾酒が弾ける。とてもおいしい焼肉であった、

ことは間違いがないが、舌の記憶はアディショナルタイムの防戦より短い。両チームの意思疎通は片言の英語にすることが多いが、韓国側は日本語が堪能な方も多くて驚かされる。スポーツ好きな若い部員同士で話題となったのは、もちろんW杯予選の話(韓国も後日予選を勝ち抜いて出場を決めた)、他にもヨーロッパサッカーや野球、芸能人等の話と尽きない。年配の職員同士では、経済や法令、税関制度に関する意見交換も行われていたようだ。マークする相手を間違えたテーブルでは、押しては返す乾杯の波が尽きない。そして最後には笑顔と歓声と抱擁と記念撮影になるから言葉はいらない。ホテルに戻ってから出場可能選手による「延長戦」が行われた。

筋肉痛とアルコールが残る翌朝、韓国チームとホテル前でお別れ。来年の再会を誓う。韓国側から、次の開催地として大阪はどうか、という声も聞かれたことから、関西での交流戦開催があるかもしれない。日本最員のガイドさんは、一勝一敗の試合結果にほっとしていた。済州島の先人の暮らしを伝える村や広くて長い鍾乳洞

■交流は続く

夕食は、韓国チームおすすめの農協直営の焼肉店。ここから「夜の日韓戦」が始まる。この試合会場では、目の前にずらりと並ぶ相手部員をマンツーマンでマークするか、テーブルごと

を見学させてもらった後に空港へ。

今回も事前の連絡調整に尽力いただいた幹事のお陰で無事に終えることができた。また、週末に送り出してくれた家族や職場の方、応援やカンパで支えてくれた方々にも感謝したい。



■終わりに

隣国——でなかったら、私達はこれほど意識し合い、協力し、競争し、歴史的に深い関係を持つことはなかったかもしれない。隣国——でなかったら、容易に解決しがたい課題も持たなかったかもしれない。私達は、望むと望まざるところにかかわらず、歴史物語を与えられて隣同士の場所と共に生きている。ところが近年、通信技術の普及により、隣人には面と向かって使わないであろう卑怯な言葉で、特定の人々を軽蔑し馬鹿にするコメントが簡単に発信されるようになった。これは進歩なのだろうか、それとも後退したのだろうか。

今では笑い話になるが、数年前、この交流戦の通算成績を確認したとき、過去の勝敗や得失

手交した記念バナー

点について両チーム間に若干の認識の違いがあった。当時は日韓の歴史専門家が「日韓歴史共同研究」を行っていたが、二〇〇〇年以降同じイベントを目的の当たりにしたはずの両チームにまで「確認作業」の必要が生じることになるのは驚きであった。私達はお互いに、常に正しい公的組織ではなく、過ちを犯すことがある人間の集まりであったのだ。それでも両国の部員は、批判の応酬に陥ることなく相手の主張に耳を傾け、足りない情報を補いながら当たり前と信じていた事実を修正して問題を解決し、今も交流を続けている。目の前の彼らは、決して客人にトングは握らせまいと肉を焼いてくれる紳士であり、交流戦黎明期から友好親善に尽力する先輩部員達をずっと尊敬する心を持った誇れる友人である。それでも、彼らとの試合に負けるのはとても悔しいので私達は練習に身が入る。こうして、日々の鍛錬の目標として、自分達のために相手が欠かせない大切な存在となっている。これから役所や企業で公共政策に携わろうとし、あるいは公共的な役割を担おうとする学生に覚えておいてほしいことは、サッカーと同様に、個人では無力でも、組織や団体の力を借りると経験でき、実現できることが多くあるということである。また、人には皆それまでの事情があつて考え方は異なるけれども、行動と経験

を通じて自分や相手の考え方は変わっていくということである。共通の課題を乗り越える努力をすることが重要であり、無関心や忌避、批判のみでは何も変わらない。京大公共には、こうしたことに気付かせ、前向きな考え方を育む講義や環境が備わっていると感じられる。

なお、日韓両国のサッカー交流は、法務省検察庁や経済産業省等でも行われているようである。政治的な動きが簡単に観光や経済、国民感情に影響を及ぼしてしまう時代にあつて、職員レベルの親善交流が続くことには意義がある。中国など他の近隣国も巻き込んだ交流に発展させることができるかは今後の課題となるだろう。

■謝辞

執筆にあたり助言を頂いた財務省サッカー部員の方々と活動を紹介する機会をくださった『公共空間』編集部の皆様に感謝申し上げます。本稿の責任は私個人にあることを申し添えます。

北條隆

ほうじょうたかし

東京都出身。平成19年財務省入省。主計局、大臣官房、金融庁総務企画局等で勤務し、平成24年より行政官国内研究員。小学2年からサッカーを始める。GKからFWまで全ポジションを経験させてくれたコーチに感謝。中学では、試合中に誤ってボールの代わりに地球（地面）を蹴って骨折してしまった影響で、京都への修学旅行を断念。時を経て、大学院で修学の機会に恵まれた。